

## 聖霊降臨後第七主日（7月17日の聖書箇所）

### I 第一朗読・創世記18章1―15節

1 主はマムレの檜の木のでアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。2 目を上げて見ると、三人の人が彼に向かつて立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、3 言った。「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。4 水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。5 何か召し上がるものを調べますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」その人たちは言った。「では、お言葉どおりにしましょう。」

6 アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。

「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」

7 アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。8 アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

9 彼らはアブラハムに尋ねた。

「あなたの妻のサラはどこにいますか。」

「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、

10 彼らの一人が言った。

「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。11 アブラハムもサラも多くの目を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていった。12 サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。

13 主はアブラハムに言われた。

「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。14 主に不可能なことがあるか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」15 サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

#### 語句の意味

■ 創世記18―19章では、もともとは独立していたと思われる四つの物語が組み合わされ、一つの大きな塊を作り上げている。

1 節 ■ 「主は…現れた」。読者には「三人の人物」が「主」であることが初めから明かされている。

■ 「マムレの檜の木の所」。ヘbron近郊にあり、ロトと別れたアブラムが天幕を張った場所（創一三18）。檜の木（あるいはテレピンの木）は背が高く力強い木で、遠くからでも目立つ。そこで、目じるしとなったたり、特別に重要な出来事と結び付けられて語られたり、特に偶像礼拝が行われる場所になっている（ホセ四13）。だから、マムレの「檜の木」も礼拝所の存在を示す聖木だったのだと思われる。

2 節 ■ 「三人の人」。ソドムの滅亡を語る19章では、「二人の御使い」になるので、この三人は主なる神と二人の御使いであろうか。あるいは、神の顕現形態はさまざまな形をとりうる、と見ているのか。

3 節 ■ 「お客様」。この語は人間に使われ、「主人様」の意味にもなるし、神を表して「わが主」にもなる。母音の振り方によって区別されるが、ここでは奇妙なことに、神を表す母音（アディーナイ）が振られている。■ 「僕」。原文では「あなたの僕」。

5節■「何か召し上がるもの」。直訳は「パンひとかけら」。実際にはサラも召し使いをも動員した、豪華な料理であった。■「僕」。原文では「あなたがたの僕」。3節の「あなたの僕」がここでは「あなたがたの僕」。動詞形も2節では単数形だが、3―4節では複数形。ここでも、神の顕現形態の多様性を表しているのか。■「では、お言葉どおりにしましょう」。直訳は「あなたが言ったようにあなたが行ってください」。ていねいな応答。

9節■「妻のサラはどこにいますか」。客人は単刀直入に本題（男子誕生の約束）に入る。

10節■「彼らの一人が言った」。原文では三人称単数の動詞形「彼は言った」。9節では複数形が使われ、「彼らが言った」。

①アブラハムの物語は創12章から始まる。神の指示によって「生まれ故郷、父の家」を離れた彼は、カナン人が住むパレスチナの地を転々とするが、甥のロトと分かれた後に、長く留まることになるのが、今日の朗読にも登場する「マムレの樫の木」であった。創一三18に

アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの樫の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた

とあり、創一四13に

アブラムは当時、アモリ人マムレの木の傍らに住んでいた

とある通りである。今日の朗読は、この「マムレの樫の木」に住むアブラハムのもとに現れた「三人の人」についての物語である。しかし、多くの学者は、この物語の起源をさかのぼって行くと、イスラエル以前の聖所伝説にたどりつくと考えている。「マムレの樫の木」はもともとアブラハムとは関係のない、カナン人の聖所であったのであり、この聖所の由来を語る物語にたどりつくということである。もちろん、そのようなカナン人による物語が実在しているのではなく、学者の推測にすぎないが、このような説明が正しいとすれば、現在の物語に見られる不自然さを解消できるのも確かである。

学者たちの説明によると、カナン人による物語の段階では、登場するのは「三人の人」ではなく、「三体の神々」であり、それらの神々の顕現が「マムレの樫の木」を聖所にしたという物語であった。このようなマムレに関する民間伝説があるのを知った聖書記者は、アブラハムについての物語にそれを利用したが、その際、多神教的な要素を排除し、自分たちの信仰にあうよう変えて、「三体の神々」ではなく、「三人の人」にされ、しかも彼らは「主（YHWH）」の背後に姿を消してしまう。それが最もつきりと分かるのは、10節である。新共同訳は「彼らの一人が言った」と訳しているが、原文は「彼は言った」とあるだけである。この「彼」はもちろん「三人の人の中の一人」と取ることもできるが、11節に「主は言われた」とあるので、「主」を指すと見ることも不可能ではない。少なくとも「三体の神々」の顕現の物語だったのが、「主」に置き換えられて行く過程を示していると言えるかもしれない。

そうであるなら、カナンの聖所起源物語を利用した聖書記者が、「三体の神々」を一気に「主」に変えなかった理由はどこにあるのだろうか。1節で「主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた」と述べているのだから、いつそう気になる。おそらくこの問いに次のように答えることができるだろう。主（YHWH）はそれと分かる形で人に顕現するのではなく、ごく日常的な出来事を通して現れるので、アブラハムの目には神としてではなく、「三人の人」としか映らなかったのである。

いずれにしても、カナンの聖所起源物語では神の顕現をテーマとする話だったが、創世記では神の顕現は背後に退き、イサクの誕生を予告する物語に変えられている。ちなみに、イサク誕生の予告は創一七15以下にも語られているが、ここでは神がじかにアブラハムに現れ、語りかけている。創17章は祭司資料（紀元前6世紀）に属し、創18章はヤヴィスト資料（前10世紀）に属している。また、創17章でイサクの誕生を信じられずに「笑って、心の中で言った」アブラ

ハムのように、創18章でサラも「笑って腹の中で言った」と記されている(12節以下)。彼らが不信仰だからではない。ごく日常的な出来事を通して語りかける神の言葉に気づくのは、いつでも誰にでも可能なことではないからである。

それでも、神は人間の思いにとらわれることなく、それを越えて働くから、私たちの取るべき態度は人間の考えを中心にして動き回ることではなく、腰をおろして聞くことのある。

②今日の朗読は「主はマムレの檜の木の所でアブラハムに現れた」で始まっているから、この物語に登場する「二人の人」が神を表しているということは、読者には最初から明かされている。しかし、アブラハムはそれをまったく知らないのだから、彼らが突然、目の前に現れたとき、旅人以上の者だとはゆめゆめ思わなかったはずである。

しかし、アブラハムは天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください」と語りかけるが、傍線部を直訳すれば、「私の主」であり、「もし私があるの目に好意を見つけたなら」であり、「あなたの僕」となるから、きわめていいねいな言葉を用いている。時刻は「暑い真昼」(1節)だから、「足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください…疲れをいやしてから、お出かけください」と招くのも当たり前だが、アブラハムの善意を強調する表現だといべきだろう。

さらに6-8節ではアブラハム自身が指揮をとって、料理を準備する。その内容は、5節で「何か召し上がるもの(パンひとかけ)」と述べていたのとは雲泥の差がある。パンを焼くのは女性の仕事だから、サラが駆り出されます。動物をほふるのは男性の仕事だから、召し使いも動員される。こうして調理されたご馳走を給仕するのはアブラハム自身である。

彼は神とは知らずに、丁重にもてなしたが、これは一種のテストであったとも言えよう。神はアブラハムにプレゼントを与えようとしているが、彼がそれにふさわしいかどうか、あらかじめ調べようとしたのだ。

相手が神だと気づけば、誰もが出来るかぎりのもてなしをするであろう。しかし、アブラハムはそれとは気づかず、最大級のもてなしを実行している。これはアブラハムの善良さの現れである。そこで、神は持参したプレゼントを差し出す。それは「妻のサラに男の子が生まれる」という知らせである。

それにしても不思議なのは、「二人の人」として現れた神が、単数形で表現されたり、複数形で表現されていることである。例えば、3節ではアブラハムが自分を「あなたの僕」(直訳)と呼んでいるから、相手はだれか一人のはずだが、5節では「あなたがたの僕」(直訳)と呼んでいるから、相手は複数のはずである。また、9節では「アブラハムに彼らは言った」(直訳)と書いているのに、10節では「彼は言った」(直訳)と単数形に変えている。

これは二つの物語が合体した結果かもしれない。一つの物語では「三人の客人の訪問」について語られ、他の物語では「一人の客人が告げた子供の誕生」について語られていたが、それが一つに合わされ、今の形になったとすれば、説明がつくからである。

しかし、別の問題が生じる。二つの物語を合体させた編集者は、なぜあのような不整合をそのまま残したのか、それが新たな疑問となる。

彼らがそのまま残したのは、神は「三人」として現れると同時に、「一人」にもなる方だと考えていたからかもしれない。三人にもなれば、一人にもなれるということは、三人でもなければ、一人でもないということと同じである。これをさらに言い換えれば、イスラエルの神は現れつつ、隠れる神だということになる。

へブ一三二「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」と述べているように、隣人に仕えることが神に仕えることになる。神はどこにでも、どのようにでも現れることができるからだ。

## II コロサイの信徒への手紙 1章 21—29 節

21 あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。22 しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。23 ただ、揺るぐことなく信仰に踏みどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、それに仕える者とされました。

24 今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。25 神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。26 世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかになりました。27 この秘められた計画が異邦人にとつてどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。28 このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。29 このために、わたしは勞苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

### 語句の意味

24 節 ■ 「苦しむこと」。29 節の「勞苦しており、…闘っています」と対応している。24—29 節は一つの單元であるが、その主題はパウロの苦しみである。パウロ書簡ではほとんどの場合「苦しむこと」(パセーマ)は使徒があずかるキリストの「苦難」を表す(ロマ 8:18、2 コリ 1:5、6、7、7、フイリ 3:10)。■ 「キリストの苦しみ」。「苦しみ」は前項の語とは異なり、ギリシア語のスリープシス〈圧迫、抑圧、苦難、苦悩〉。この語は新約では、ほとんどすべてキリスト者の「苦難」の意味で使われており、「キリストの苦しみ」という用例はこの箇所以外には見られない。黙 1:9 の用例に照らせば、「キリストに結ばれてキリスト者が受ける苦難」の意味にとることができる(2 コリ 1:5、フイリ 3:10)。

25 節 ■ 「余すところなく伝える」。直訳は「満たす」。神の言葉を満たすとは、①成就する、②くまなく伝える、③現実化する(福音を宣べ伝えること)によって信者を作る、④十分に伝える、等の意味が考えられる。いずれにしても、神の言葉はキリストにおいて決定的に啓示されたので、内容の不足を補うという意味ではなく、神の言葉の現実化(出来事になること)をはかるという意味である。26 節 ■ 「秘められた計画」。前節の「神の言葉」の言い換え。次節の内容から見ると、キリストの十字架による人類の救いを指しているだろう。■ 「神の聖なる者たち」。この手紙ではキリスト者を指す。

28 節 ■ 「完全な者」。単に倫理的な意味で誤りのない、円熟した者という意味ではなく、キリストに方向づけられた人間の在り方を表している。

## III 福音・ルカ 10 章 38—42 節

38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。

39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、

そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」41 主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

語句の意味

38節■「ある村」。マルタとマリアの姉妹は、イエスがラザロを生き返らせる場面でも登場する(ヨハ11:1-44)。そこによると二人が住んでいる村はエルサレム近郊のベタニアである。しかし、ルカでは、95でエルサレムに向けてガリラヤを出発したばかりなので、一行がすでにエルサレム近郊に到着したとは考えにくい。■「マルタ」。アラマイ語マーレ(「主人」)の女性形で「女主人」を意味するが、これがこのエピソードで何か象徴的な意味を持つのかどうかは疑問。■「家に迎え入れた」。ここでのイエスの行動はユダヤ教徒の常識に次の三点で対立する。①親族以外の女性と一対一で接している。②女性からもてなしを受ける。③女性の家で教えている。

39節■「足もとに座って」。「主の足もと」は話に聞き入る弟子が占める場所。女性がこのような態度を取るの、当時の宗教世界ではまったく常識外れなことである。ルカのイエスは女性を男性と同等のものとして行動する。

40節■「せわしく立ち働く」。ギリシア語(ペリス・パオー)のもともとの意味は「まわりへと引かれる」。給仕にあれこれ気を使うあまり、マルタは心があるべき中心から離れ、まわりへと拡散している。

41節■「マルタ、マルタ」。この繰り返しは、マルタに対するイエスの思いやりの深さを表す。■「多くのことに思い悩み、心を乱す」。マルタの心は外面的なことがらに奪われて混乱し、あるべき関心から離れている。

42節■「良い方」。二つの、あるいは多くのものの中で「良い方」。すなわち「一番良いもの」という意味になる。

①先週の朗読箇所、イエスは、永遠のいのちを受け継ぐために必要な態度として、「神を愛する」と「隣人を愛する」ことをあげ、「よいサマリア人」のたとえで、隣人への愛を具体的に説明していた。しかし、そこではもう一方の「神を愛する」ことについては触れられてはいなかった。今日の福音では、「マルタとマリア」が登場し、神を愛するということは神にどのように仕えることなのか描かれ、これら二つの話によって「永遠のいのち」への道が示される。原文のギリシア語で見ると、今日の福音は三つの段落から構成されていると考えることができる。38節では「イエスを迎えるマルタ」が登場し、39-40a節では「マルタとマリアの対照的な姿」が描かれ、40b-42節では「必要なは一つ」であるという結論がイエスによって与えられる。

旅路にあるイエスとその一行は、ある村に入る。この旅とは951から始まったエルサレムに向けての最後の旅を指している。「すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れ」る。ここで「すると」と訳されている単語は「だがしかし」の意味に取ることもできる。

当時のユダヤ人社会では、男性が親族以外の女性と一対一で接したり、女性が男性を家に迎えて入れてもてなしたりすることは普通のことではない。イエスを迎えたのが習慣に反して女性であったことを強調するために、「だがしかし」を冒頭に置いたのかもしれない。

イエスは、ユダヤ人と異邦人の垣根を打ち壊しただけでなく(「善いサマリア人」のたとえ)、男性と女性の間にも差別がないことを宣言する。すべての人が平等に永遠のいのちへの道に招かれているのである。

マルタにはマリアという姉妹がいたが、二人は対照的な態度でイエスに接する。「マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」とあるが、「足もとに座る」のは、権威ある師の教えに耳を傾ける弟子の姿勢を表している。使徒行伝でもパウロが「ガマリエルのもと(直訳では「足もと」)」で律法を学んだと述べている(二二3)。マリアはイエスの足もとに座って、その言葉にじっと耳を傾けていたのである。

それに対して、マルタはイエスをもてなすために「せわしく立ち働いて」いる。この語はもともと「まわりへと引かれている」ことを表す。マルタは中心であるイエスから離れ、いろいろなもてなしに注意を奪われ、心を悩ませている。やがて彼女は、自分にだけもてなしの準備

をさせるマリアに我慢できなくなり、イエスのもとに近づいて「手伝ってくれるようにおつしやってください」と頼みこむ。マルタの不満はマリアに向けられている。

ここで「手伝う」と訳された語は「ある者の側に加わる＝味方する」という意味も持っている。マルタは、マリアもイエスのそばを離れて自分の側に加わり、もてなしの準備を手伝うべきだと考えていたのである。準備に忙殺されている彼女は主を見失い、自分を中心としてしまっている。マルタもイエスを喜んで迎えたのだが、その奉仕は的外れになってしまふ。イエスはそんなマルタに親しみを込めて「マルタ、マルタ」と語りかけ、「多くのことに思い悩み、心を乱している」と指摘する。

「思い悩む」の原義は「心を用いる」だが、大切なことに心を用いるなら、それは実りをもたらすことはない。心を用いるべき大切なことは「ただ一つ」、中心にいるイエスの足もとに座り、心をイエスの言葉へと向けることである。

マリアはマルタとは違った方法で、よりふさわしくもてなしている。「神を愛する」とは、神に奉仕することだが、その第一歩は神の言葉に耳を傾けることである。それが「永遠のいのち」へと通じる道である。

#### IV 今日の朗読から

##### マムレの榿の木の所で現れ

神が「サラを通して男の子を与えよう」と語るのを聞いたアブラハムは、ひれ伏しながらも笑いました。彼は百歳、妻サラは九十歳になっていたので。今日の朗読でも「サラに男の子が生まれる」という約束が与えられますが、今度はサラがひそかに笑いました。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもないと思ったからです。しかし、神が約束された時期に、サラは身ごもり、年若いアブラハムとの間に男の子を授かりました(創21章)。彼らが神は自然の法則を乗り越え、子供を与えることのできる方だと知ったとき、「マムレの榿の木」は忘れることのできない特別な場所になったはずで。

##### 秘められた計画を知らせる

今日の朗読に繰り返される「秘められた計画(ミユステーション)」とは、キリストの十字架によって成就した救いの計画のことです。救いの計画がなぜ「秘められた計画」と呼ばれるのかと言えば、人間の予想や思いをはるかに越えた方法で成就する救いだからです。パウロが「あなたがたのために苦しむことを喜びとする」ことができるのは、この計画が「栄光に満ちている」と知っているからです。神がパウロを選んだのは、異邦人にこの「秘められた計画」を知らせるためです。それはパウロにとつて苦しみを乗り越えさせる喜びの源泉なのです。

##### 主の足もとに座って聞き入る

紀元前8世紀の預言者イザヤは「お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と言いました。しかし、当時の人々がそうであったように、私たちも「それを望まず」、「そうしてはいはられない」と言つて、あれこれ手をつけます。イエスはそれを「多くのことに思い悩み、心を乱した」状態だと指摘し、さらに「必要なことはただ一つである」と教えます。それは「主の足もとに座って聞き入る」ということです。このような姿勢が、「逃避のための行動」ではない、「実りある行動」を生み出します。